卒業生への BOOK LIST

卒業・修了おめでとうございます！

これから社会に旅立つ皆さんに、ぜひ読んでほしい本、
20代で読んでほしい本などを先生方に選んでいただきました。
ぜひ、今後の読書にお役立てください！

2015.2

BOOK LISTにご協力いただいた先生方

● 工学部

機械知能工学研究系

図書館長　鶴田隆治先生

物質工学研究系

中戸晃之先生、高瀬聡子先生、毛利恵美子先生

先端機能システム工学研究系

趙孟佑先生、高原良博先生、花澤雄太先生

人間科学系

本田逸夫先生、八丁由比先生、イアン・Ｃ・ラックストン先生

● 情報工学部

電子情報工学研究系

小田部荘司先生、藤原暁宏先生

システム創成情報工学研究系

田上真先生

機械情報工学研究系

伊藤高廣先生、河野晴彦先生

生命情報工学研究系

坂本順司生先生、前田衣織先生

● 工学部

機械知能工学研究系

図書館長　鶴田隆治先生のおすすめ

（本館）　（分館）

809.2 H-2　809.2 H-1

- ツカむ！話術
  パトリック・ハーラン　KADOKAWA

  2012　ISBN:9784041107065

  本館 閲覧室2階　分館 閲覧３階 語学

（本館）　（分館）

081 K-3 2003　361 I-5

- わかりやすく〈伝える〉技術
  池上彰　講談社

  2009　ISBN:9784062880039

  本館 閲覧室１階 文庫　分館 閲覧３階 社会科学

著者は，お笑いコンビ「パックンマックン」の一人ですが，最近は語学教育番組やバラエティにも出演しており，芸人というイメージはむしろ薄いのではないでしょうか。ハーバード大学卒業という知性派であり，その才能に池上彰氏が注目して東工大の非常勤講師に担ぎ出したことから，この書籍が生まれたようです。理工系学生を対象とした講義から生まれたので身近に感じられ，コミュニケーション力は努力して磨くものという内容は社会人になる前に有益な情報と思います。また，池上氏の「わかりやすく＜伝える＞技術」（講談社現代新書）も別な視点からお薦めします。

中戸晃之先生のおすすめ

（本館）　（分館）

080 / I-1 / 169　　081 / I-4-1 / 202-1

■ 論語

金谷治訳注

岩波書店（岩波文庫, 青(33)-202-1, 青-129,884-885a）

1971.10-1983.2　本館 閲覧室１階　※2001年出版のワイド版岩波文庫（169）を所蔵

分館 閲覧3階総記

このブックリストが年度ごとに切り替わるからには、論語も毎年紹介せざるを得ない。論語は、遠く飛鳥時代から第二次世界大戦の前まで、日本人の教養の指標であり続けてきた。その知識は、天下国家社会文化…をまともに論じるための暗黙の資格であった（だから、論語の知識もない人間が教養やら世界やらを語るなど、ほとんどギャグである）。2000年の時の審判を経たこの古典中の古典は、我々の知性の最深部を育む必須栄養素である。

■ イザベラ・バードの日本紀行（上）（下）

イザベラ・バード著；時岡敬子訳

講談社（講談社学術文庫, [1871]-[1872]）

2008　ISBN：9784061598713, 9784061598720

本館 閲覧室２階

（本館）

291 / B-8 / 1　　291 / B-8 / 2

■ 朝鮮紀行：英国婦人の見た李朝末期

イザベラ・バード著；時岡敬子訳

講談社（講談社学術文庫）

1993　ISBN：4061593404　本館 閲覧室１階 文庫

（本館）

081 / K-4 / 1340

19世紀の大紀行家による、明治維新直後の日本、および李朝最末期の朝鮮の旅行記である。いずれの国でも、いわゆる田舎に深く入り込んで、当時の風物や民俗を記述している。近代以前の日本や朝鮮を近代的視点で記録した数少ない本の一つであり、明治維新後の150年のヴェールに覆われた日本文化や日本人を再発見できる本でもある。著者のキリスト教倫理観を物差しとして、日本人、アイヌ人、朝鮮人の間のある種の本質的な違いが、長所短所とりまぜて露わになる。昨今、グローバル化の声喧しく、隣国関係もやたら猛々しいが、こういう基本文献を読んでからものを言うべきだろう。

高瀬聡子先生のおすすめ

青い光に魅せられて：青色ＬＥＤ開発物語

赤崎勇　日本経済新聞出版社

2013　ISBN:9784532168513

本館 閲覧室３階　分館 閲覧３階 自然科学

（本館）549.7 A-6

（分館）549.7 A-4

ノーベル賞を受賞する前年に出版された本です。

松下で青色ＬＥＤの開発が前人未到だと知って、「これこそ自分が研究するべきだ」と思った。とのことです。

また、成果が得られず、研究者の多くが青色ＬＥＤ開発から離れて行っても「できないと思ったことは一度もない。」と言われています。

研究テーマとの出会いと継続する意志の強さがあれば、赤崎先生のようになれるかも。

この本が面白いと思った人は、多分、研究者に向いています。

毛利恵美子先生のおすすめ

ラッセル教育論

ラッセル　岩波書店（岩波文庫 33-649-2）

1990　ISBN:4003364929　　分館 閲覧３階 総記

（分館）081 I-4-1 649-2

１９２０年代に書かれたものですが、現代においても新しさが感じられる名著。「広い見識を持つことが相対的に自分自身への執着を減らし、結果的に幸福をもたらす」というのは、意外と教育の効用として忘れがちではないでしょうか。育児書としても最も役立った１冊。

■ マキアヴェッリ語録

塩野 七生　新潮社; 34刷改版

2009　ISBN: 9784101181066　本館 閲覧室２階

（本館）

311.2
S-16
2

大人になるということは、多くの人にとって、自分の意思とは関係なく、様々な立場を生きなくてはならなくなることだと思います。イタリア、ルネサンス期の政治思想家マキアヴェッリは徹底的に現実的な指針を与えてくれます。

■ シェイクスピアを楽しむために

阿刀田高著　新潮社

2000　ISBN: 4103343206　本館 閲覧室２階

（本館）

932
A-9

スコットランド独立を問う住民投票が行われ、例年よりイギリスのニュースが多かったような気のする本年、小学校以来、久しぶりにシェイクスピアに関わるものを読みました。マクベスの舞台はスコットランドだったのかとか、リチャード３世は必要以上に悪人に描かれている理由があったのかなど、小学生には実感のなかった情報が現実味を帯びて入ってくる楽しい読み物です。

■ ブラウン運動(物理学one point 27)

米沢富美子著　共立出版

1986　ISBN：4320032365　本館 閲覧室３階

（本館）

420.8
B-8
27

学部４年生の時に著者の講演を聞き、「パラダイムシフト」という言葉がとても印象的でした。この本は、原子を現実のものとして認識することによる１９世紀から２０世紀へのパラダイムシフトがブラウン運動を中心に綴られています。その時代の科学者がどう感じていたのかはわかりませんが、現代の科学が細分化された時代には、この時代がとても魅力的に映ります。

趙孟佑先生のおすすめ

- 火車
  宮部みゆき　双葉社

  1992.7　ISBN: 4575231177　本館 閲覧室２階
  分館 閲覧３階 文学

（本館）913.6 M-94　（分館）913.6 M-64

高原良博先生のおすすめ

- 古寺巡礼
  和辻哲郎　岩波書店

  1969I　本館 閲覧室２階　分館 閲覧３階 総記（分館は文庫版を所蔵）

（本館）702.1 W-3　（分館）081 I-4-1 144-1

- 文明のかたち(思想との対話 10)
  吉川幸次郎　講談社

  1968　本館 閲覧室１階

（本館）108 S-5 10

花澤雄太先生のおすすめ

- 勝ち続ける意志力:世界一プロ・ゲーマーの「仕事術」
  梅原大吾　小学館

  2012　ISBN: 9784098251322　本館 閲覧室１階 ベストセラーコーナー

（本館）798.5 U-1

現役プロ格闘ゲーマーとして活躍し続ける梅原大吾氏の著書、
様々な事柄で勝ち続けるための著者の考え方がまとめられた一冊。

人間科学系

本田逸夫先生のおすすめ

※　以下では、グローバル化との関係が深い3冊を含む４冊の本について述べるが、他にも紹介したい有益な書物がある。当ブックリストの2014年版における筆者の執筆箇所＝次のサイトの10-13 頁を参照されたい。

https://www.lib.kyutech.ac.jp/libt/top/news/booklist2014.pdf

特に、『ブラック企業』『反貧困』『現代の貧困』を紹介した10-12　頁は、卒業生諸君の（近い）将来に密接に関わる内容なので、ぜひ読んでいただきたい。

■ 金融が乗っ取る世界経済：21世紀の憂鬱

ロナルド・ドーア　中央公論新社

2011　ISBN: 9784121021328　本館 閲覧室１階 文庫　本館 閲覧室２階

（本館）

081 C-1 2132　333.6 D-1

今日、世界的な経済の動向は、私たちの生活にかつてないほど急激ないし深刻な影響を及ぼすようになっている。したがって、それについて学ぶことは、現代において有意義に生きるために必須といってもよいだろう。小著ながら、本書はその目的にとって格好のものである。

本書のテーマは「経済の金融化」であり、それは（付加価値を創造しない）金融が（それを創造する）実体経済に対する支配を強化し、富・収入・人材等をも吸収しつつある現象を指す。その「金融化」がリーマンショック等の危機をひき起こして甚大な被害をもたらしたにもかかわらず、世界的に拡大し続け、日本でも「新自由主義」を奉ずる小泉・竹中らの政治家や官僚、学者らにより推進されて、社会の巨大な変貌（変質）を生じさせつつある。本書では、その「金融化」の諸局面、それを支えるイデオロギー（「市場の効率性仮説」や「株主価値論」等）・技術（金融商品の「証券化」等）・政策（諸々の規制緩和＜たとえば、「小売」銀行と投資銀行・証券会社の分離を強制したグラス・スティーガル法の廃止＞や税制・年金「改革」等）とその弊害（「信頼の侵食」に基づく投機ないし不正な金融取引の増殖、所得や富の格差拡大、社会保障の衰退等）、そして金融危機の克服や予防のための国際的な取り組みの内容と限界等が丹念に明らかにされている。やや難解な箇所もあるが、知らない専門用語や事実等は辞書等で調べて丁寧に読んでいけば主な論旨は理解できるだろうし、得るところが大きいはずである。

著者は60年以上も活躍してきた高名な日本研究者であり、本書の冒頭で、自らについて「生まれ育ったイギリスと比較して、日本の社会構造、常識、通念を解明することが生業であり、生きがいの中心でもあった。中でも「モノ作り文化」と「カネ作り文化」の違いが大きな関心事であった」と描写している。この一節からも推測できる通り、本書では「アングロ・サクソン的資本主義」の「進化の軸」である「金融化」に対して、ドイツや日本の「社会に埋め込まれた資本主義」の方により好意的な立場から、委曲を尽くした批判が展開されており、その多くは説得的にみえる（もっとも、著者は日本の資本主義を英米のそれと対置して肯定的に評価するあまり、たとえば日本の会社主義がエゴの＜無自覚な＞膨張につながりやすいことや社員ないし労働組合の会社からの自立を阻害してきた事実等に対する認識が十分でない。それは著者の原発観にも通ずる問題点であろう）。

その説得力は、凡百のエコノミスト等と異なり、東西の歴史・文化・学問・習慣等に対する、著者の広い学識としばしば日本語の俗語も交えたユーモアに支えられている。その見識は、政治経済学political economy の系統に属する思想家達（マルサス、リカード、アダム・スミス、Ｊ・Ｓ・ミル、マーシャル、ピグー、ケインズら。なお、政治経済学と対照されるのが現在の主流である新古典派経済学で、著者はそれを「小人の学問」と評している）や丸山眞男ら「進歩的文化人」とその批判者達等の「憂国の士」「憂社会の士」に対する共感、あるいは profession という語の含意（＝「社会に対して責任感をもつ行動が期待されている」職業）や「社会的公正」「公共精神」の重視等に、よく示されている。

ただし、著者はまた、「不可逆的に見える傾向でも、永遠に続くことはな」く、「大きな戦争がなければ、大きな社会変化も来ない」ことを指摘して、将来は「金融化」の傾向が米中の覇権争いを経て転換するだろうことを示唆している。

ともかく著者は、日本人がアメリカン・スタンダードをグローバル・スタンダードと（誤）解して「金融化」のイデオロギーに「洗脳」され、利益の追求に狂奔する「小人の道」にいわば集団転向しつつあることを、憂えている。その言をどう受けとめるか、が「モノづくり」にかけるエンジニアはもちろん、私たち日本人すべてに問われているといえよう。

感染症：広がり方と防ぎ方

井上栄　中央公論新社

2006　ISBN: 412101877X

本館 閲覧室１階 文庫　本館 閲覧室３階

（本館）

081 C-1 1877　493.8 I-5

予想もつかない形で出現し、あるいは国境を越えて急激に拡大する感染症は、現代における重大な脅威として、注目されている。本書の著者は、その感染症に関する日本の中枢的な機関である、国立予防衛生研究所（予研）とその後身、国立感染症研究所（感染研）で要職を経た（退官後は大学教授）研究者である（ただし、それらの機関の環境汚染疑惑に対してどんな立場をとったのか、気になるところである。また、血液製剤の使用当時、それでエイズが発生すると予想した人は皆無だ、「人間が新しいことをはじめると、新しい病気が起こるのだ」という「あとがき」の一節は、薬害エイズが不可抗力の所産であるかのような印象を与えるもので、疑問が残る）。

そうした経歴の著者らしく、本書では感染症に対する的確な理解と対応の必要が説かれている。その主張の眼目は、感染症をむやみに恐れず、－－本書の副題が示すように－－その病原体（ウィルス、細菌等）の「伝播（でんぱ）経路」を把握し、適切な対策、特に予防策を講ずることである。すなわち、病原体が人体のどの場所から出て他の人のどの場所（呼吸器、消化器、生殖器＜の粘膜＞等）へ移動するのか、移動の媒体（飛沫、空気、埃、糞便、水、昆虫等）、体外で病原体が生存可能な期間等を知り、それに応じて伝播をおさえる効果的な対策をとるべきだ、という。

具体例の一端として、日本人が途上国等の外国を訪れる際の二、三の注意事項だけをあげれば、塩素消毒されていない水道水はＡ型肝炎（や嘔吐下痢症のノロ）ウィルスを含む可能性があるので生水（から作った氷の入った飲み物）や生牡蛎を口にしないこと、長期間滞在する場合は事前にＡ型肝炎ワクチンの予防接種を受けること、狂犬病に感染しかねないので犬をなでないこと、等がある。またシンガポール等、熱帯の諸都市ではデング熱の広がる条件（人口集中とネッタイシマカの生息）ができつつある由である。

種々の感染症の発生・伝播の機構や病原体の特徴（生態）についての本書の説明からは、学ぶことが多い。特に、ウィルスは通常、宿主を（殺してしまい、それから）離れると長時間存続できないので、（ヒト）ウィルスないし人の遺伝子の変異により、数百年単位の期間をかけて共存の関係に移行するのだが、短期的にはウィルスの移りやすさに応じて、強毒株に代わって弱毒株のウィルスが優勢になる（＝生物学者エワルドの説）という見方は、興味深い。また著者は、伝染病の発生に即応して、病原体が不明な当初の状況でも適切な対策を講じるための、「実地疫学専門家」の養成とそれに対する国の支援の強化が急務である、と主張している。

著者によれば、日本は「日常生活のなかで病原体に感染しにくい状態が保たれている」との意味での清潔度が世界一である。2003年におけるSARSの世界的流行の際に日本人旅行者の感染が皆無だった主な理由も、おそらくそこにある。その「日本人の清潔文化」（たとえば、（銘々）箸の使用、入浴・手洗い、屋内でのスリッパの使用等）の「利点と欠点」を明確に意識し両者の比較検討に基づく感染症対策を講ずるのが、重要である。その「欠点」との関係では、過剰な清潔の追求は子どもの免疫力を鍛えることと矛盾しアレルギーの要因にもなり、ワクチンにはそれを防ぐための役割もある、という。そして、「これから先進国で一番重要になる感染症」で、「居住環境の整備」というハード面の対策では伝播をおさえられないのがインフルエンザとエイズであり、それらの予防には、まさに日本人の「清潔文

化」というソフト、具体的にはマスクとコンドームの使用の習慣がきわめて有効である。それらの習慣が失われてはならない、と著者は警鐘を鳴らしている。

その関連で、ピルの販売促進のため、コンドームよりもピルの使用の方が進歩的（女性解放的）であるかのようなイメージづくりを日本のマスコミや政府に対して展開し一定の成功を収めつつある、米国の巨大製薬企業についても言及されている。著者の立場は、日本人、特に女性の健康を守るためにそれと衝突し、さらには「外国にない日本の良いところをグローバル・スタンダードにさせる」べし、とするものである（ビルに反対ではない）。日本の「コンドーム文化」は、女ならぬ「男が避妊の負担をするという、他国にない文化」とも表現されている。著者の分析が正しいとすれば、そこからは、グローバル化の時代における逆説的な対立、すなわち「進歩」を装いつつ世界を席巻し画一化しようとする巨大な利権勢力とナショナルな習慣の「保守」とその「世界的」な貢献を説く個人との対立を、見ることができよう。

本書は、感染症と人類の文明史的な係わりを巨視的に描いた類の労作とは射程を異にし、感染症の機構と感染症をめぐる現代的な状況の解明と、実践的な方策の提示に重点を置いている。だが、だからといって視野が狭いわけではない。（伝播経路と関連する）日本語と英語・中国語等との発音の違い、日本の製糸業が世界を制覇しえた緒条件、花粉症発生源が草（ブタクサ、西洋）か木（杉、日本）という相違等について論じた本書のコラムは、著者の広い学識（とそれに基づくユーモアも）を示している。その意味で、著者は教養を備えたプロフェッショナル、現代における「技術に堪能なる士君子」（＝本学の建学の理念）の一人といえるかもしれない。

なぜあの人はあやまちを認めないのか：言い訳と自己正当化の心理学　エリオット・アロンソン、キャロル・ダブリス

河出書房新社

2009　ISBN: 9784309244709　本館 閲覧室２階

（本館）

361.4
T-26

本書の著者はアメリカの社会心理学者たちであり、そのテーマは、自らのおかしたあやまちを認めず自己正当化して責任逃れをする、という行動である。それはどんな人間も、程度の差こそあれ、免れることはできない。しかも、その帰結としてしばしば悪循環に陥り、事実認識を歪め、誤りや不正、個人（友人や夫婦等）や集団（国家等）間の争いを拡大させていく。

著者たちによれば、－－アロンソンの師、Ｌ・フェスティンガーが精神分析や行動主義等に対抗して提出した概念である－－「認知的不協和」が自己正当化の原動力である。認知的不協和とは、自己イメージ（多くの場合は、まともな人間であるとのイメージ）と矛盾する行動をとった人が陥る緊張状態を指し、その解消のために人は自己正当化を行いがちだというのである。

しかもそれは、自己欺瞞を伴うために明らかな嘘よりも強力で危険なものである。たとえば、他人に理不尽な攻撃を加え苦痛を与えた者は、苦痛を与えて当然だったと自ら思い込むために相手への憎悪を強め、さらに攻撃性を強めがちである。この「自己欺瞞の恐るべき算術」に基づく「暴力の連鎖」と対照的に、誰かに善行を施したことを正当化するためにさらに善意と憐れみを増し加えていく、という「善の循環」も生じるとされている。こうした説明は、利益の「合理的」な計算と選択ばかりでなく「意味」やアイデンティティーにこだわり、その結果、皮肉にも、明らかに不合理な行動にも陥りうる、いわば人間の性（さが）を捉えており、より説得的にみえる。

人間の心理の微妙なひだに通じていることと対応して、本書の叙述はしばしばユーモラスで笑わせられるし、有名な文学作品等の一節や格言等の引用も豊富であり、著者たちの長年の蓄積と成熟した人間理解がうかがわれる。

そうした叙述は楽しく読めるが、同時に自己正当化の心理的メカニズムは著者達の言うように人ごとどころではなく、恐いところがある。さらに個人の次元を超えた弊害も恐ろしい。たとえば、先の「自己欺瞞の恐るべき算術」は組織的な残虐行為や暴政をも支えているし、本書で詳しく述べられる、自己正当化の（主に米国における）事例の弊害も深刻である。その一端をあげると、ブッシュ政権によるイラク戦争の際の、大量破壊兵器の不在や戦後のイラクの治安の不安定化が判明した後にも行われた、居直り的な正当化（しかも、共和党員の過半数は大量破壊兵器不在の証拠を受け付けないことで、自らのイラク戦争支持の立場との不協和を解消しようとした由。いわゆる「確証バイアス」の例である）。ヒステリー的に流行し、多数の無実の被害者を生み、無数の家庭を破壊したという、記憶回復療法（＝精神病の原因が幼少期の性的虐待にあると決めつけ、多くの場合、実際にはありもしないその記憶を回復することにより治療しようとするもの）。警察・検察・裁判官による――虚偽自白や証拠の紛失・捏造まで動員して行なわれることも珍しくない――冤罪の正当化、等である。

これらの例からは、少なからぬ「社会悪」には狭い意味での利害だけでなく自己正当化が深く関わっていることが、理解できる。また、「確証バイアス」「幼稚なリアリズム」等、本書で言及される（いわゆる「批判的思考」に関わる）諸概念も知的関心を触発するものであり、本書は心理学だけでなく、広く社会科学の入門書としても適当ではないだろうか。「科学的」「専門的」な研究（たとえば生物学・薬学等の分野の）が、スポンサー企業等の利害に歪められ（＝利益相反行為になり）つつ、その事実を否定して自己正当化されやすいということも指摘されている。エンジニアや研究者を志す諸君には、よく知っておいてもらいたい点である。

著者たちは、自己正当化の連鎖から災厄の泥沼に陥るか否かを左右するのは、最初のわずかな選択の違いだと強調しており、そして最後の章で、自らあやまちを認め「不協和とともに生きる」方策をも説いている。その内容は、権力に対する外部からの監視や是正の制度（たとえば、説明責任の要求や取り調べの録画、等）が不可欠だとの正当な指摘とともに、個人レベルでは、あやまちを認め責任をとることが実は解放をもたらすことを知るべきだ、という主張から成っている。さらに、「間違いを忌み嫌う」というアメリカの文化を変革しなければならない、との、自国の文化に対する批判的な要求も行なわれている。

以上の拙い紹介からも想像できるように、本書は人間と政治・社会に対する、リアルで透徹した、かつ良心的な知見と提言を含んでおり、本物の知性の成果といえる。本書から学ぶことを勧めるゆえんである。

アフリカ学入門：ポップカルチャーから政治経済まで

舩田クラーセンさやか 編　明石書店

（本館）

302.4
F-2

2010　ISBN: 9784750332314　本館 閲覧室２階

昨年の秋に筆者の大学院の演習的授業において、「感染症やアフリカについて学びたい」という要望が受講生達から述べられた。それを受けて筆者の選んだテキストが『感染症』と本書である。

本書は一言でいえば、アフリカを学ぶための非常にユニークで啓発的な入門書である。たとえば、序に当たる「アフリカ学への誘い」では、同調指向が強い日本で周囲の無関心や反対にもかかわらず「アフリカに興味をもったあなたは、素晴らしい」と読者に語りかけ、励ましている。編者・執筆者たちも「アフリカと出会わなかったら、なんとつまらない、ひとりよがりの人生だったことだろう」という思いから、この本を著したのだ、という。

本書の内容は、「ポップカルチャーから政治経済まで」という副題も示唆するようにきわめて多彩で、そのすべてを紹介することはできない。筆者が興味をひかれた箇所を中心に一部を挙げると、第Ⅰ部「アフリカを学ぶ」では、近現代史を中心としたアフリカの歴史（第１・２章）、アフリカの貧困・開発・紛争等に関する硬質の社会科学的な分析を含む議論（第３章以下。――これらの章では、前述の「金融化」と関連して、世界銀行やIMFの主導した1980年代の「構造調整」が、英米由来の新自由主義的な「改革」＝小さな政府と民間主導への転換をアフリカ諸国に強制し、経済の縮小と失業・貧困の深刻化等、悲劇的な結果を生んだ、と指摘されている）、音楽を中心とした文化論（第９章）。第Ⅱ部「アフリカに接近する」では、日本－アフリカ交流史（第１章）、日本のアフリカ協力（JICA、国連、NGO等。第２章）等がある。さらに第Ⅲ部「アフリカで学ぶ、働く、根を下ろす」では、アフリカ留学や、国連・国際機関・企業人・ジャーナリスト・NGO職員等として働くことの機会や実際について、当事者や経験者達が論じている。一夫多妻のマサイ族の男性の妻となった（＝「根を下ろ」した）女性の手記もある。そして、巻末には「資料・アフリカお役立ち情報」として、様々な情報源や豊富な統計資料等が収められている。

内容の多彩さの一方で、本書ではいくつかの論点が異なる著者によってくり返し述べられてもいる。先ず、遠く貧しく野蛮で、野生動物が多く、紛争や飢餓に苦しんでいる、という、主にネガティブ（否定的）なステレオ・タイプ（＝紋切り型）のアフリカ・イメージに対して、（特にサハラ砂漠以南の）アフリカの多様性が強調されている。五十数カ国に及ぶアフリカの国々の自然や民族、産業、政治と経済の現状等は様々で、貧困のさらなる深刻化や紛争が

みられる一方で、比較的自由で安定し経済的に発展したり、インターネットや携帯電話が普及したり、都市化が進む国や地域もある。しかも、アフリカの多様な人々は相互に無関係なモザイクではなく、同じ地域としての自覚や目標を共有している、という。

ネガティブなアフリカ・イメージに関連して、強調されている第二の点が、いわばアフリカの主体性の尊重である。外からの恩恵的な援助や介入の対象としてアフリカの人々や地域政府を遇するのではなく、人々の文化や生活に根ざした、助け合いや生きる知恵等の自助努力を尊重し励ますのが重要だということである。

たとえば、第Ⅰ部第３章の著者、高橋直樹氏は、自らの研究歴について説明し、「当初の志（こころざし）」はアフリカを苦難から救い出したいとの「おこがまし」い思いに在ったが、1980年の最初のアフリカ訪問で「貧困や停滞というだけでは語れない、明るく輝くアフリカ」と出会った、として、次のように述べている。「以来30年間、アフリカの光と闇を見つめ、それを学問的に考察し、語ることをライフワークとしてきた。そして、アフリカを救うのではなく、その苦難を理解しつつ、アフリカの人びとが自らの道を選び取り、歩んで行くことを支えたいと思っている」。（このように、いわば舞台裏の肉声を伝える、比較的長い「著者紹介」の欄が各章の初めに設けられているのも本書の特徴で、工夫を感じさせる）

その「光」とは、本論で次のように言及された内容をおそらく指している。すなわち、無文字社会であるがゆえに豊かに発達した会話や口承文学、舞踊や歌謡等。科学技術とは別の、「過酷な自然と直接向き合い、自らの手でこれを利用して生きるための知恵や技術」。「濃密で重層的な人間関係」に基づく分かち合いや助け合い、等である。高橋論文の直前に置かれたコラムでも、モザンビーク在住15年の日本人女性が、突然の訪問者を歓待し、子どもや家族を大事にし、隣人等の遠隔地の葬儀にも同行し悲しみを共にする、という人々の姿を描写して、「現在の日本に暮らす人より、精神的には豊かで幸せに暮らしている人が多いようだ」と結んでいる。

そして、日本人や政府等のアフリカ観やアフリカとの係わりに対する批判的な指摘も、本書で繰り返されている。アフリカを原始的で停滞したままと捉えるステレオ・タイプもそうだが、他にも、アフリカの貧困を専らアフリカ人の責任とする等、アフリカと日本との関係（経済的なつながりや人間としての係わり）を否定する姿勢。近視眼的に自らの援助プログラムの成功のみを追求しその効果やいわば副作用に無関心な傾向。「顔の見える」「草の根に届く」援助を標榜して、実際には援助受け入れ国の行政機構を迂回しそれに対する現地の人々の信頼を損ねがちだったこと。「未開で野蛮な」アフリカを開明するとの欧米の植民地主義的な姿勢に追随しアジアの植民地化の手本にしようとした歴史。日本は欧米とは異なり国際協力において「アフリカでは手を汚していない」とする独善、等である。

同じ人間としての係わり、という関連では、筆者には、ケニア人女性の聞き書きを中心にアフリカのジェンダーを論じた第Ⅰ部第８章（富永千鶴子執筆）が、特に印象的であった。その主人公ベリダは、1936年に生まれ、一方で女性を差別し封じ込めてきた因習（たとえば、父親が婚資を受け取った男性との結婚の義務等）や夫の暴力等に苦しめられながらそれらと戦い、キリスト教に入信し、「家族計画」に積極的で、食料ビジネスにも挑戦して成功する、という「進取」的な面を示した。

しかし他方では、今では廃（すた）れた性器切除の慣習は、女性をふしだらにすることを防ぐので維持した方が良かったと評したり、（自らの娘の経験に照らして、）親に孝行しないことになるなら女子の教育など無駄だ、と述べる等、因習的な思考の一部に執着してもいた。経済的な困窮や飲んだくれの夫に苦しめられ、自殺しなかったのが不思議に思われるほど問題を抱えながら家族のために働き詰めの人生を送ってきた彼女は、（その終盤に近づいて、）「年をとることは恐ろしいことです。考えただけでも気分が落ち込みます。年をとると役立たずになります。子どもたちも奇妙なものをみるような目で年寄りを眺めたりします」と語っていた。以上の語りには、苦難と闘いつつ必死により良く生きようとした、そして長所と短所をあわせもった、私たちと同じ等身大の人間がうかがわれて、親しみや愛しさと共感を覚えるのではなかろうか。

最後にもう一つ、読みごたえのある章として、第Ⅱ部第２章「日本のアフリカ協力　その２・ＮＧＯ」を挙げておきたい。著者、林昭仁氏は国際関係論専攻の大学院生、かつ大学の非常勤講師であるとともにNGO活動の経験もあり、気鋭の若手らしい筆致でNGOとは何か、その独自の役割や悩み、日本のNGOの歴史や活動の特徴等について、論じている。

たとえば、NGOに関わるということは、社会の不公正に対して他人任せにしないこと、「おかしい」と声をあげていくことである。（したがって、）NGOを理解する上では無償性よりも自発性が重視されるべきである。また、日本のNGOの活動では、子どもと関連する、教育、保険、医療、人道支援等が社会の支援をえやすいために盛んな（かつ、アフリカはそうした課題を多く抱えている地域である）一方で、紛争予防、民主化支援、人権侵害への抗議等は支援されにくいとの偏りがある、という。

そして、現場で個々の人々のニーズに応えるのか、そうではなく貧困等を生み出す構造を変えることで問題を克服しようとするのか、という選択について、著者は、「２つの選択肢の間を悩みながら模索し続けることが、今のところNGOの発見した最良の答え」である、とする。最後に、NGOはNGOであるからといってそれだけで開発の有効なアクターだとは言えないことを自覚し、自らを問い直し続けるべきだ、とも述べている。

NGOの西洋思想史における起源（キリスト教会の慈善活動や市民社会等）にまではさすがに論及されていないとはいえ、当論文はなかなかの力作であり、一読を勧めたいと感じた次第である。

八丁由比先生のおすすめ

（本館）

081
C-1
914

テクノヘゲモニー

薬師寺泰蔵

中央公論社（中公新書, 914）

1989.3　ISBN: 4121009142　本館 閲覧室１階 文庫

電気工学科出身の国際関係学者が執筆したユニークな本。

国家の興亡を技術の視点から説いている。歴史、政治、経済、技術革新、移民等々、様々な要素を含むが、単純に読み物としてもおもしろい。

サブタイトルは「国は技術で興り、滅びる」。

ラックストン先生のおすすめ

- The diaries and letters of Sir Ernest Mason Satow (1843-1929), a scholar-diplomat in East Asia

  selected, edited, and annotated by Ian C. Ruxton

  E. Mellen Press

  （本館）

  935
  R-3

  1998　ISBN: 0773482482　本館 閲覧室２階

  またはその日本訳

- アーネスト・サトウの生涯：その日記と手紙より

  イアン・C・ラックストン著；長岡祥三, 関口英男訳

  雄松堂出版

  （本館）

  210
  T-24
  10-b

  2003.8　ISBN: 484190316X　本館 閲覧室２階

  電子ブック　https://elib.maruzen.co.jp/elib/html/BookDetail/Id/3000008284

アーネスト・サトウは１９９４年本学に赴任して以来小生の研究の中心人物である。語学達者、外交官及び日本学学者 (Japanologist) で、大変興味深い英国人である。初めて来日したのは通訳生（Student Interpreter）として１９歳の若さで１８６２年、生麦事件の一週間ぐらい前の時である。著者として彼の一番有名な本は１９２１年ロンドンで出版された「A Diplomat in Japan」（日本語訳：「一外交官の見た明治維新〈上、下〉(岩波文庫)」。幕末の出来事を生々しく描いた自伝の一部である。日本の幕末明治維新のキーパーソン及び目撃者として知られているが、また在日英国公使として１８９５年から１９００年まで日本に勤めた。その他、シアム（タイ）、中国、モロッコとウルグアイにも外交官として働いた。是非サトウの目から１９世紀と２０世紀始めの日本と諸外国を考えてください。

※　「A Diplomat in Japan」本館閲覧室2階　210||S-40||10

「一外交官の見た明治維新〈上、下〉(岩波文庫)」分館3階総記　081||I-4-1||425-1,2

● 情報工学部

電子情報工学研究系

小田部荘司先生のおすすめ

「孟夏の太陽」

宮城谷昌光　文藝春秋

1991.9　ISBN：4163127208　分館 閲覧３階 文学　学生用図書

（分館）

913.6
M-308

学祖、山川健二郎先生の遺稿集に「乃木大将の殉死」という心約について書かれた文章があります。このなかで、程嬰と公孫杵臼の話がでてきます。中国の春秋戦国時代にはさまざまな話が残されていますが、この話は知らなかったので調べたら、宮城谷昌光の短編作品が出てきました。4つの短編の2番目の「月下の彦士（げんし）」がこの程嬰と公孫杵臼の話です。

主君のために命をかけて動く二人は、まさに心約を交わし、それぞれの役割を果たします。

またこの短編集はみごとで、4つの話がちゃんと繋がっています。人物が入り込んでいたり、表現が難しかったりするので、読みにくいとは思うのですが、大人の小説として感銘を与えてくれるに違いありません。

以下だいたいのあらすじです。

登場人物が入り組むので、大河ドラマ官兵衛の登場人物にあてて紹介しましょう。

荒木村重に捕まった官兵衛は殺されてしまいます。このままでは官兵衛の息子の松寿が殺されてしまいます。官兵衛の家臣の栗山善助と母里太兵衛は相談します。

太兵衛「戦って死ぬのと、逃げて生きるのとどちらが難しいか？」
善助「死ぬ方が易しいに決まっている」
太兵衛「では俺は易しいほうをする。善助は難しい方をしてくれ」

太兵衛は松寿を連れて山に隠れます。善助は荒木村重のところに行きます。
善助「千金をくれたら、松寿の行方を教える」
村重は喜んで千金を渡し、太兵衛を攻めます。

太兵衛「裏切り者の善助！二人で松寿を守ると誓ったのに！」
太兵衛と松寿は殺されてしまいます。

10年後、松寿は長政と名を改め、荒木村重を攻めてこれを討ち、父の敵をとります。善助は本物の松寿を隠して、密かに成人させていたのです。喜ぶ長政の前に善助は死に装束で現われます。

善助「官兵衛様と太兵衛に報告に行きます。」
長政は自害をやめさせようとしますが、叶いません。その後長政は3年の間喪に服したとのことです。

官兵衛の二人の家臣、善助と太兵衛の間には「心約」があったと言いますが、この「心約」についてはまた別の機会にでも紹介しましょう。

※注意：ここでは官兵衛の登場人物を使っただけで、官兵衛は殺されておりません。

程嬰と公孫杵臼
http://www006.upp.so-net.ne.jp/china/HUMAN4E.HTML

藤原暁宏先生のおすすめ

■ 「スティーブ・ジョブズ（1）（2）」
ウォーター・アイザックソン；井口耕二訳　講談社

（分館）		（本館）	
289.3	289.3	289.3	289.3
I-1	I-1	I-4	I-4
1	2	1	2

（1）2011　ISBN:9784062171267　分館 閲覧３階 歴史　学生用図書
本館 閲覧室2階　学生用図書
（2）2011　ISBN:9784062171274　分館 閲覧３階 歴史　学生用図書
本館 閲覧室2階　学生用図書

言わずと知れたベストセラーですが、IT業界にいる限りは1度は読んでおきたい本だと思います。プレゼンの上手さや独創性に対する異常なまでのこだわりで有名だったスティーブ・ジョブズですが、その理由を垣間見ることができると思います。

■「うらおもて人生録」　（新潮文庫 い-21-2）
色川武大　新潮社

1987.11 ISBN:4101270023　分館 閲覧３階 文学 学生用図書

（分館）
914.6
I-45

20代に「生きていくための技術」を学んだ本です 。

システム創成情報工学研究系

田上真先生のおすすめ

■「無限論の教室」（講談社現代新書, 1420）
野矢茂樹　講談社

1998.9　ISBN:4061494201　分館 閲覧３階 自然科学　学生用図書
本館 閲覧室１階 文庫　学生用図書

（分館）
410.1
N-6

（本館）
081
K-3
1420

無限について、とても気楽に考えることが出来る本です。一読の価値があります。

機械情報工学研究系

伊藤高廣先生のおすすめ

■ 「時刻表２万キロ」

宮脇 俊三　角川文庫

2008.12　ISBN:9784041598016　分館 閲覧３階 歴史　学生用図書

（分館）
291
M-4

鉄道紀行文学の傑作。鉄道の旅に出たくなります。

■ 「ドイツ=鉄道旅物語」

野田 隆　平凡社新書（知恵の森文庫）

2005.7　ISBN:4487792215

（分館）
293.4
N-2

海外鉄道旅行書の傑作。ドイツの鉄道に乗りに行きたくなります。

■ 「理科系の作文技術」

木下 是雄　中公新書

1981.9　ISBN:9784121006240　分館 閲覧３階 自然科学　学生用図書

本館 閲覧室３階　学生用図書

（分館）	（本館）
407	407
K-3	K-8

仕事をする人必読の書。必ず役に立つ。

■ 「放課後はミステリーとともに」

東川篤哉　実業之日本社

2011.2　ISBN:9784408535845　分館 閲覧３階 文学　学生用図書

本館 閲覧室２階　学生用図書

（分館）	（本館）
913.6	913.6
H-115	H-152

最近図書館の本で読んで面白かった。軽く読めます。

河野晴彦先生のおすすめ

■ 「英語のバカヤロー!」

古屋裕子　泰文堂

2009.3 ISBN:9784803001648

「英語のバカヤロー!：「英語の壁」に挑んだ12人の日本人」
古屋裕子　泰文堂　（ポケット版）

2012.5 ISBN:9784803003512　分館 閲覧３階 語学　学生用図書

（分館）
830.4
F-2

ノーベル賞を受賞した中村修二氏をはじめとして、各分野の第一線で活躍する著名人が英語に苦労させられた体験を赤裸々に語ります。堅苦しい本ではなく、さらっと読めます。

■ 「秘密」

東野圭吾　文藝春秋（文春文庫 ひ-13-1 ）

2001.5 ISBN:9784167110062

「秘密」

東野圭吾　文藝春秋

1998.9 ISBN:4163179208　分館 閲覧３階 文学　学生用図書
本館 閲覧室2階　学生用図書

（分館）	（本館）
913.6	913.6
H-147	H-45

これまで本をあまり読まなかった人には、東野圭吾の本がおすすめです。この「秘密」は、昨年紹介した「手紙」とともに最高傑作だと思います。ぜひ読んでください。生協でも見かけました。

生命情報工学研究系

坂本順司先生のおすすめ

「昨日までの世界（上・下）」

ジャレド・ダイアモンド著，倉骨彰訳　日本経済新聞出版社

(上)2013.2	ISBN：9784532168605	分館	閲覧３階	社会科学	学生用図書
		本館	閲覧室１階	ベストセラーコーナー	研究用図書
(下)2013.2	ISBN：9784532168612	分館	閲覧３階	社会科学	学生用図書
		本館	閲覧室１階	ベストセラーコーナー	研究用図書

（分館）		（本館）	
389	389	389	389
D-7	D-7	D-3	D-3
1	2	1	2

現代社会は文明化されて便利で快適になった一方、様々な課題を持ち越し新たな問題も生み出している。現代人は不便で不快な未開社会の段階を嫌い逃れて来たわけだが、著者のジャレド-ダイアモンドは、地球上に広く残る未開社会にも学ぶべきあるいは参考にすべきアイテムがたくさん存在すると唱える。他人への警戒と受容、個人の感情と法の秩序、子供の保護と放任、高齢者の尊重と敬遠、危険への備えと楽観、宗教の役割、使用言語の複数性、食生活などについて、伝統的社会は多様な選択肢の実例を提供しているが、今やそれらの多様性が急速に失われつつあるので、急ぎ救い上げてより良い明日を築く教材にしようと誘う。

鳥類学や進化生物学の研究者としてニューギニアでのフィールドワークの経験が長い米国人著者は、原始的社会の珍奇な風習を外在的にカタログ化する姿勢ではなく、自ら体感した別世界の論理と実情を内在的に記述する姿勢を採るリベラリストでありながらも、18世紀のジャン-ジャック-ルソーのようにそれを理想化するような陥穽には無縁のリアリストでもある。

我ら日本人のように、近現代西洋文明にどっぷり浸かり適応して全面的な恩恵も受けながら、一方で人類が総体としてもう少し違った方向に舵を切る方がより良い世界に近づくだろうし、我々こそがそれを提示できる素地と責務があるのではないかとも感じる者たちに対して、さらにその視野を広げて説得力を増す手懸かりと、広い意味での同志が現れたという希望とを与えてくれる好著である。

朗読がCDのオーディオブックになっており、英語のヒアリング教材にも適する。

半世紀を超える研究活動と８０年になりなんとする個人的体験が、トータルで人類社会への体系的示唆・指針になりうるとは、何とうらやましい学者人生であることか。

■ 「文明の生態史観」（中公叢書）

梅棹忠夫著　中央公論社

1967.9　ISBN：4122001358　分館 閲覧３階 社会科学　研究用図書
本館 閲覧室２階　研究用図書

（分館）	（本館）
361.6	361.6
U-1	U-2

世界史を概括的にとらえ、日本および日本人の自己認識を確立するのに好適の書。

生物学から人類学に転向し、深い学識に基づく独創的な思索で幅広い分野に影響を与え、大阪・千里の国立民族学博物館館長を長く務め、2010年に亡くなった碩学 梅棹忠夫が、生態学的考え方を人類文明の歴史に適用し、当時の言論界に強いインパクトを与えた一連の論考を集めた書物。

インド・中国・ロシアの台頭や、キリスト教vsイスラム教の「文明の衝突」、民族と国家の乖離・離反など、近年の国際情勢を底部から理解するのにも有効な思考の枠組みを与える現代的古典。日本人が自虐的にも夜郎自大にも陥らず、紳士的な誇りを保ちバランスのとれた感覚を養って、世界を冷静に眺めるのにも役立つ。

前田衣織先生のおすすめ

■ 本当に役立つ「人生の知恵」ノート

バルタザール・グラシアン　イースト・ブレス

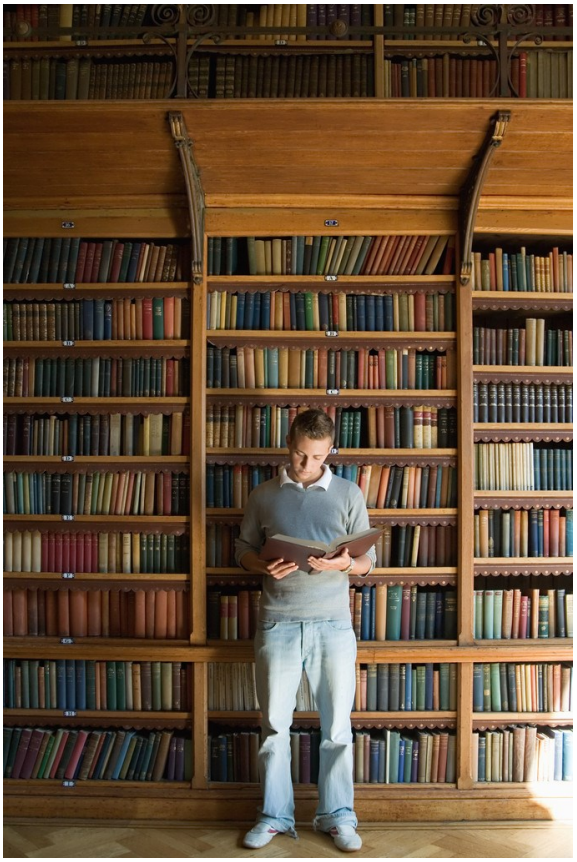
1967.9　ISBN：9784872579123　分館 閲覧３階 哲学　学生用図書

（分館）
159
G-5

この世を生きていく時の行動規範となる本です。

本の初めに紹介があるように、４００年前から読み継がれている内容で、ニーチェやショーペンハウアーにも影響を与えたといわれています。

「愚か者とはつきあわない」「誠実になりすぎない」など言葉だけでは疑問に思うような言葉も出てきて、考えさせられます。全てをこの通りに、という訳ではないと思いますが、皆さんの今後の人生において、何らかの参考になれば幸いです。



これからも素敵な本と出会って下さい。

■編集・発行■
九州工業大学附属図書館
図書館サービス係・情報工学部分館図書係
2015年2月（第3版）
tos-service@jimu.kyutech.ac.jp
tos-jhotosyo@jimu.kyutech.ac.jp